

中国製ペレットストーブ検証

特性把握しビジネス化

ふじ研究所（本社・札幌）は、中国製ペレットストーブの取り扱いに向け、対象機器をさまざまにセンサーや調査機器などで検証している。同一メーカーの6機種を対象に、燃焼性だけでなく運用時の煙排出量、一酸化炭素（CO）濃度、灰分などのデータを収集。外部に依頼して電気設備部も検査し、輸入品を単に販売するのではなく、特性を十分把握した上でアフターサービスに配慮したビジネス化を目指している。

燃焼や煙排出データ収集

ペレットストーブは中国のニンボーグレースマシーン製。日本製と比べて価格の安さが魅力で、佐橋光好社長は「欧州にも輸出しているためかデザインも優れる」と説明。燃焼部へのペレット供給量を制御して火力調整する機能やリモコン操作による利便性も備える。

実証は国の補助を利用した。タイプが異なる3—6キワットの6機種を札幌

の輸入会社を通じて仕入れた。ストーブは煙突型だったためFF式に改良し、排気・吸気筒の口径は日本に合うように専用のアダプターも作った。

実証は会社近くへの賃貸マンションや他社の協力を受けて帯広で行った。1台は電気関係の部品を

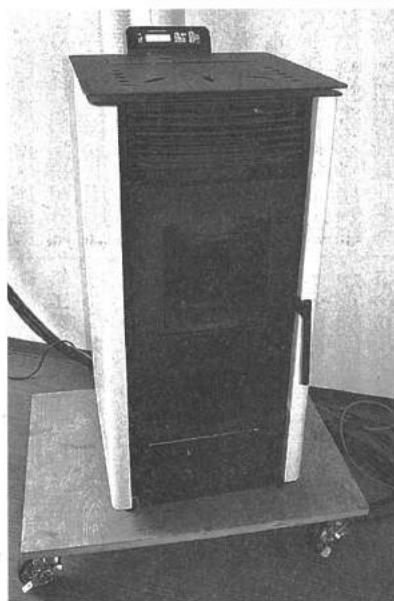
札幌市内のラボでデータを検証しているペレットストーブ

検査するため、輸入機器の検査やPSE認証事業を行っているコスモス・コーポレーション（本社・三重県伊勢市）に調査を依頼した。

佐橋社長は今回の取り組みを「製品は」海外の認証は取得している。しかし、それは国際規格なのか、日本で要求される条件と合致しているのか

などをじっくりと確認したかった」と話す。各性能がカタログ値と運用値で合致しているかも確かめた。

ラボとして用いた賃貸マンションには、TVカメラ、温湿度センサー、CO濃度センサー、排気センサー、外気温度センサーなどを室内外に設置し、点火から稼働、消火までの運用状況をデータロガーやパソコンで24時間検証。「排気などの」温度だけでなく、点火時や焼却時に煙がどれぐら出るのかも検証（佐橋社長）。使い勝手に影響する、ペレットを燃やした際に生じる灰の量についても細かくチェックした。



夏ごろに輸入会社と一緒に現地を訪ねることにしており、佐橋社長は「生産現場を一度視察し、相手と会うことで信頼関係を構築したい」と意欲を見せる。